

いることは理解できるが、この書籍の目録はその漢訳書名をあげるだけに満足してよいのだろうか。

いまでも私の手許に漢語の奥付けのない少数民族語の刊行物があるように、近い将来、原題のみを対象としなければならない時代が来て、しかも書誌情報は正確でなければならない、つねに正しい読み方で入力しなければならないとなると、目録の作成は至極厄介な仕事になるだろう。

原題と奥付けの漢訳名の不一致にはいくつかのタイプがある。黒白戦争のように漢訳で慣用名を使うほかに、原題は具体的な内容を指しているのに、漢訳名は概括的な書名を与えているものも多い。実は上述の傣族の古典籍もその範疇に入る繁雑な例である。ここで単純な例を一つあげておきたい。

手許にこれも B 6 型の小冊子だが、漢訳奥付けでは、『西藏文法四種合編』（藏文）図称三菩札等著となっている書物がある。（第四次印刷、民族出版社、1989）しかし表紙とタイトル頁にあるチベット語書名を訳すと『三十頌・添性論とその注釈、シトゥーの口訳』トンミサンポータとグルチュ父子選著となる。1989年に4刷まで行き、全部で15万部も発行しているが、内容は専門学術書なのである（なぜそんなに多数刊行されているのかわからない）。タイトル頁の裏側にある「本書は

シガツツエ
日喀則のタシ・ゲペル寺院にある古い雕板から翻印したもの」（活字本）という書誌情報は是非付け加えていただきたい。

少なくとも特定の大学図書館では、このような古典籍の処理を十分できる人材がいることが望ましい。それには単に文字の習得だけではなくその文字と深くからんだ言葉の習得も重要なのである。

自動翻訳が進んでくると、いずれ創設されるであろう翻訳センターのような機関から外国語文献について有用な情報を得ることが可能になる。須く専門家の協力を得て、世界の文字について、世界の言語について解説と見本を提供してくれる Database の作成が必要になろう。これはさほどむづかしい仕事ではないように思える。そしてまた手にあまる資料をかゝえたとき、どこの文字が使われ、どこの言語が記録されているかを判定してくれる機関もほしいものである。これは国際的な機関になるかも知れない。そのような機関は、世界中に埋れる稀書珍籍を発掘する役目も果たしてくれることになるだろう。

私の所蔵する数点の貝葉本も、いずれは京大図書館に寄贈したいと思っているが、そのときには、各本の内容を判定して正しい目録が入力されることを期待している。

パリ市歴史・地誌関係資料コレクション

工学部教授

加藤 邦 男

今回、本学附属図書館に収蔵されることになった、パリ市史料、144タイトル、273冊は、特別の由緒のあるコレクションではなく、近年フランスの古書市場に流通する特にパリ市に関連した史料的价值が認められるものを、表題の名称のもとに一まとめにしたと聞いている。それは、18世紀から最近までの約250年間に出版された古書類で、その内容は雑多である。これを通覧して、建築的にみた史料的特徴の幾つかについて述べておく。

書誌的にみれば、初版本の他に、版を重ね改訂

を受けたものなどがあるが、それらの出版年別にみたタイトル数はおおよそ次の通りである。すなわち、18世紀刊行本が7タイトル（うち20世紀初頭の複写本1冊、銅版パリ大地図の復刻本1冊を含む）、19世紀前半のもの8タイトル、19世紀後半のもの55タイトル（15世紀の手稿本の刊本1冊を含む）、20世紀前半のもの62タイトル、20世紀後半のもの10タイトル、年代不詳のもの2タイトル、合計144タイトルである。また内容的にみて主なものを挙げると、通史・概説は1724年刊本か

ら1948～1956年刊本までの25タイトル、公共・記念建造物、街路、セーヌ河岸、市民生活の景観などを示す図版に特色のあるものが18世紀の木版画を含み34タイトル、歴史的景観の写真を収めているものが18世紀以前の墓碑銘類の写真(1890～1918年刊)から1940年代までの20タイトル、地図及び地誌的記述は18世紀刊行本2タイトル(うち1タイトルは復刻)19世紀刊行本4タイトルを含む21タイトルが数えられる。

パリ市は、中世以来セーヌ河を中心にして、商都 Ville (セーヌ河右岸)、国家権力中心シテ島 Cité、大学 Université (セーヌ河左岸)の3地区及びシテ島の大聖堂と各所に設立される教区教会堂や修道院によって、固有の相貌を具えて発展してきた。この都市についての歴史的記述は、16世紀から17世紀にかけて、「パリの古い時代の華 Le Fleur des Antiquitez」とか「パリの古い時代の舞台 Le Théâtre des Antiquitez」等の表題を付した出版物にその萌芽が存するが、その多くは古い逸話や歴史的物語によって当時の知的好奇心を満たすものであった。Henri Sauval (1623～1676)の著作は、それらに代わる本格的な歴史記述を目指し、多くの史料を調査し、伝承の聞き取り調査などの情報収集に心がけ、それらを記録的記述形式にまとめて、当時の歴史家たちの間で好評であったと言われる。その手稿がH. Sauvalの死後、修正加筆されて出版されたのが1724年刊の *Histoire et Recherches des Antiquités de la Ville de Paris*, 3vols (目録抄33)である。これは、原著者の意図とは異なり、収集された史料や情報を生のままに雑に集成しただけのものとなっているが、Sauvalの時代のパリ市を知る上で貴重な第一次史料であり、その第3巻にまとめられている文献目録は、今日では失われた史料を含んでいて、歴史書としてみると欠陥を有するものの、パリ市史研究の古典的史料であることに変わりはない。Jean Lebeuf, *Histoire de la Ville et de Tout le Diocèse de Paris*は、1754、1758年に初版が出され、内容が教会教区に限定されるが、はじめてパリ市の近郊の歴史が地誌的に研究されていて、史料的に高い価値を持つ。Fernand Bournonらの修正補筆を加えて

刊行されたものが本コレクションに入っている(目録抄21)。パリ市の建築や都市の造営に関して、中世からルネッサンスにかけての事情は、上述のH. Sauvalのほか、Germain Briceの著作(初版、1684年、目録抄6)も参照しなければならない。本コレクションには1725年刊4巻が2冊に合本されて入っている。19世紀の史料としては、Jacques-Antoine Dulaure (目録抄10)がもっとも成功を博したが、想像力を働かせ実証性に欠けるところがあって、古典的史料ではあるが、パリ市史のヒストグラフィつまり体系形成過程の一時期を画する以上の意味は少ないようである。フランス大革命百周年を記念するため公的にパリ市が企画して、かの有名なGeorges - Eugène Haussmannが主宰する *Histoire Générale de Paris* 史料叢書(目録抄16)がある。これとは別に、La Société de l'Histoire de Paris et de l'Ile-de-Franceの研究誌(1874～1933年刊、目録抄24、25)が刊行されて成果を挙げたが、パリ市史概説に関しては、18世紀の刊行本の研究的価値を減ずるものではない。20世紀に入ってからのパリ市史の著者には、Marcel PoëteやPierre Lavedanらを挙げねばならない。Marcel Poëte, *Une Vie de Cité, Paris de sa naissance à nos jours* (目録抄31、本コレクションには、第2巻と第3巻のみ入れられたが、第1巻は土木系工学教室、第4巻図録集は文学部にすでに所蔵されている。しかしコレクションとしてこの基本的史料の一部が欠けていることはいささか遺憾である)は、都市的現象を変化の過程においてとらえながら、そこに恒常的に存する一つの生命的なるものを認める独自の史観を確立し、都市的事象 fait urbain の直接的な観察を通じて全体的相貌を読みとる方法論を展開する。これは、H. Bergsonの生命的活力の持続の思想に通じ、中世美術研究におけるH. Focillonの「形の生命 Vie des Formes」との類縁性を感じさせ、また現代フランスの都市史研究に共通して認められる歴史観の原点とも言える。それは、変化における不易な生命の現れとして、都市を有機的組織 organisme と捉えようとするもので、urbanisme を city planning のような一技術ではなく、一つ

(図版説明)

上図：Boucher, Le Pont - Neuf, 1925-26所収の挿図、
F. Hoffbauer, Vue générale de Paris, en 1588. La
Cité et le Pont-Neuf en construction (Musée Car-
navalet 蔵)

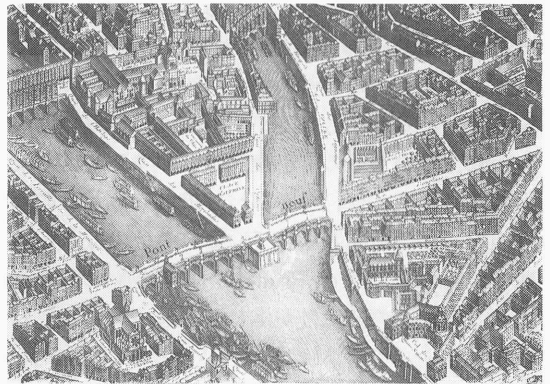
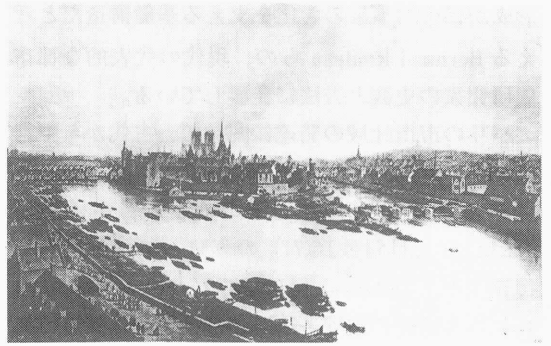
中図：Plan de Turgot - Paris 1734 (目録抄38)より
抜粋

下図：Brice, Nouvelle Description de la Ville de Paris
..., 1725所収の木版挿図 (目録抄6)

上図は、セヌ河とシテ島西端部の眺めである。1578年 Henri 4世の命令によって工事が始められた2連の橋 Point - Neuf の南半分の工事現場が見える。上部に大きく空をとり、セヌ河を真ん中に広く描き出し、その中間に変化に富んだ街並のシルエットを表す構図は、近世パリ風景画の典型的な手法である。セヌ河に架かる中世の橋梁はすべてシテ島に集約されていた。すなわち Pont au Munier, Pont au Change, Pont Notre-Dame, Pont Saint - Michel, Petit Pont などは、フィレンツェの Ponte Vecchio のように、一階に店舗を並べて乗せた妻入りの家屋を両側にぎっしりと並べた形式の橋であった。中図の上方にはよりはっきりと、そのような Pont au Munier と Pont Saint - Michel が見て取れる。

中図は、同じ場所を示す Plan de Turgot の一部である。そこには Baptiste Du Cerceau 他 の設計によって建設され、1606年に完成、1613年に竣工した新しい Pont-Neuf の姿がある。これは最初の歩行者専用の橋として計画された。この2連の橋の中央にある Dauphine 広場には Henri 4世の騎馬像 (1614年作、この像は現存せず。現在の像は大革命の破壊後、19世紀に復元的に改作されたもの) が建てられている。それは古代的都市景観の観念の再生であり、パリが王領の首都から絶対君主制の都の表現へ移行しつつあることを示す。この橋の上には当時仮設の大道芸の舞台や店舗が立ち、そこは市内でもっとも賑やかな盛り場であったと言う。この図には、橋梁の北から (Plan de Turgot は未だ東を上方向に向けているので、すなわち左から) 第2番目のアーチに、La Samaritaine のポンプ場の建築が付設されている。なおシテ島の宮殿や右岸の Saint-Germain-l'Auxerrois 教会堂と Saint-Nicolas の古港の水運の隆盛、左岸の Collège des Quatre Nations の会堂 (1661年、現在はフランス学士院) の姿が認められる。

下図の Saint - Denis 門 (1672年) は、Louis 14世が東フランスの La Franche - Comté 領を征服した戦勝を記念して、パリの注文に従って、東の Saint-Martin 門 (1674年) と一対に建設され、従来の古い城塞の風貌を払拭した、アカデミーの建築家 François Blondel の設計による近世的な記念建造物である。この図版には、当時の市壁が左右に、つまり東西方向に延びて描かれているのが注目される。同名の門は、16世紀までは Philippe-Auguste の市壁に、17世紀中葉までは Charles 5世の市壁に開かれていて、いずれも古来、国王たちが北方からパリに入城する重要な通路の結節点であった。



の芸術 art だと主張する Pierre Lavedan や街路網形成が都市的事象の変化を支える基礎構造だと考える Bernard Rouleau らの、現代の代表的な都市史研究家の史観と方法に発展している。

パリの市街地域の発達に関して、古代から中世にかけては復元的研究に頼るほかはない。Haussmann 主宰の Histoire Générale de Paris 叢書中にある Pachtère (目録抄16(7)) のガロ・ロマン時代の復元図や、Dulaure (目録抄10, 11) の挿図にみられる各時代の市壁、街路の復元研究は貴重である。16世紀になると街路パターンを基礎にして都市景観を3次元的に表現し、建造物の立面を傾斜して表現する一群の古地図が出現する。1525年頃に大判の壁掛け式大地図が存在したことが推定されている。これを原本として、16世紀の間にいくつかの古地図が製作されている。「綴織りの地図 Plan de Tapisserie」と称される古地図(5 m 22 × 4 m 14)もそのひとつで、1530~40年頃のパリを描いているとみられるが、現物は大革命時代に失われ、現物からの縮小複製版画がフランス国立図書館に保存され、今ではパリ市のもっとも古い様相を示す古地図となっている。中世の町並み研究で知られる Alfred Franklin (目録抄14)が残したこの地図の研究書が本コレクションに加えられている。この一群の地図はいずれも Philippe-Auguste (1180-1223) と Charles 5 世 (1270-1380) の時代に築かれた市壁をそれぞれセーヌ河の左岸(南側)と右岸(北側)に表し、市壁内はほとんど市街化されているが、都心は中世の様相をそのままに伝えていると考えられている。1652年刊の Plan de Gomboust は、透視図風にではなく、幾何学的に正確に表現され信頼性の高い画期的な地図であった。しかしパリ市が Louis Bretez に製作を依頼した1739年刊の Plan de Turgot (目録抄38) は、3 m 35 × 2 m 50の全体を20シートに分割したパリ市古地図であるが、鳥瞰的表現をとり、地図技法からみると前世紀に逆行している。けれども内容的にみると、18世紀前半期、すなわち Louis 15 世のパリの建築を知るうえで重要な資料である。パリ市はこの地図の製作者に、表現すべき教会堂、建造物、広場、噴水、公共記念物、

邸館などを指定し、約2年間にわたる測量と現地調査にもとづく高い精度を示しているからである。この地図の完全な復刻銅版図がコレクションに入っていることも特筆される。

19世紀には、Napoléon 3 世と Haussmann による大改造が行われ、パリ市はその表情を一変する。また1860年には、1818年から計画され現在の都心地域を画する市壁 Enceinte de Thiers 以内がパリ市に合併された。こうした近代の変貌以前のパリ市の景観を知ることができる資料も多数含まれている。Charles Nodier (1836年刊、目録抄27)、Victor Fournel (1858, 1879年刊)、M. F. de Guilhermy (1855年刊)、E. La Bédollière (1860年頃刊)、Société d'Iconographie Parisienne 学会誌(1908~1937年刊、目録抄35, 36)の記述、挿図、付図などである。そのほか特殊建造物、土木事業に関する19世紀から20世紀初頭のモノグラフィ研究、さらに1880年刊のパリ各区の下水道施設を示す大地図帖(目録抄2)などが注目される。

これらの史料を精査すればいろいろな発見が期待されよう。その内容は、建築工学に留まらず、都市の社会、経済、法律や日常生活の風俗に関連している。そうしてそれは、History の語源であるギリシア語の historia が示唆するように、歴史的事象の探求とともにその直接的な観察ないしは知覚と記述行為によって成立するフランス独特の歴史観の存在を実感させるのである。

参考文献：

- POETE, Marcel, Une vie de Cité, Paris de sa naissance à nos jours, éd. Auguste Picard, Paris, 1924 vol. 1, Introduction.
- LAVEDAN, Pierre, Histoire de l'urbanisme à Paris, in Histoire de Paris, 8 vols. Hachette, Paris, 1975.
- ROULEAU, Bernard, Le Tracé des rues de Paris, formation, typologie, fonction, éd. du CNRS, Paris, 1983.
- COUPERIE, Pierre, Paris au fil du temps, atlas historique d'urbanisme et d'architecture, éd. Joël Cuénot, Paris, 1968.